

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 村尾誠一



学位申請者 陸 嬋

論文名 中島敦研究——異空間の探求と表象

## 審査の結果

本論文は戦前から戦中にかけて、喘息の宿痾と戦いながら終えた短い生涯のなかで、中国古典の深い素養に支えられた珠玉の作品を残した中島敦の文学を、中国、朝鮮、南洋といった「異空間」と、そこで生きる人間たちが抱えたアイデンティティーの曖昧さとの関わりを焦点化する形で論じたものである。それを通して、古典の素養に基づいて時代を超越した文学世界を構築した存在と考えられがちなこの作家の、時代との関わり、さらには時代への批判といった側面を明らかにする論考である。

審査委員会は本学より柴田勝二教授、川島郁夫教授、岩崎務教授、学外より中島敦文学の専門家である中央大学文学部山下真史教授を迎え、村尾誠一を主査として構成され、2016年1月25日に最終試験がおこなわれた。提出者による内容の説明と審査委員との質疑を経て、全会一致で本論文が博士の学位にふさわしいものと判断された。

## 論文の概要

提出された論文は、序章以下、7章から構成され、最後に終章を置く。序章において、この論文の目的および構成の意図を明らかにし、先行研究との関係も明示される。終章においては、論文の総括がなされている。以下、具体的な立論である、7章の内容について略述する。

### 第一章 中島敦における朝鮮表象—『巡査の居る風景』を中心に

この章では1920年代の朝鮮を舞台とした『巡査の居る風景』を論じ、朝鮮人巡査がはらんだ内的な分裂が照射されている。日本統治下における朝鮮で巡査としての日々を送る主人公趙教英は、朝鮮人としての自我を持ちながら、その職業によって日本の統治に対して反逆を企てる者を取り締まらざるをえない。その主人公の抱えた分裂、矛盾を明瞭に浮かび上がらせるとともに、朝鮮人の立場で書かれた日本人作家の作品としてのユニークさが、日本人としての視点に偏りがちな他作家の作品との比較のなかで適切に捉えられている。

## 第二章 中島敦が見た昭和初期の中国の一側面—『D市七月叙景（一）』を中心に

この章では1929年の大連を舞台とする『D市七月叙景（一）』が扱われている。大連が舞台となっているにもかかわらず、タイトルに「D市」と付けられている点に論者は着目し、それが中国、ロシア、日本で呼称を折り重ねるための命名であり、そこにこそ大連という都市の特性が現れていることが指摘されている。すなわち異空間である大連自体のなかに数種の異空間が折り重なっている多重性があり、登場人物たちにもそうしたアイデンティティの多重性が託されている。主人公は満鉄総裁であった山本条太郎をモデルとする人物で、支配者的な位置にありながら中国人労働者の反逆に遭う不安を抱えた存在として造形されており、またそうした地位にあった人物を中心に置くことで浮かび上がってくる当時のアジアの地政学的な状況が、作品の内容とともに丁寧に捉えられている。

## 第三章 『北方行』に関する一考察—アイデンティティの探求を視座として

この章では1930年代の中国を舞台とする『北方行』について論じ、西洋人との交わりのなかで自我の不安を喚起されつづける三造や、日本に生まれながら中国人と結婚し、中国に暮らすことで、異なる国家と民族の間でアイデンティティの揺らぎを覚えつづける白夫人母娘らの登場人物の輪郭を検討している。知的な青年である一方で「腕力」のなさに不安を感じる三造は中島の分身だが、自身が抱えていた精神と身体の二元論的な分裂の問題を明確化する形象として描き出されている。また白夫人は結婚当初は軽視していた国家的な同一性に結婚後振り返られ、娘の英美も自分を支える言語が日本語なのか中国語というとまどいを抱かされる。こうした言語や帰属の問題などを通してアイデンティティの曖昧さを描出する中島文学の特質がよく整理されているといえる。

## 第四章 日本植民地支配下の朝鮮物語—『虎狩』をめぐって

この章では戦前の京城を舞台として、日本人の「私」が朝鮮人の趙大煥と交わりを持ち、共に虎狩に出かけた追憶を語る『虎狩』を論じている。この章では戦前京城の状況がよく調べられ、作中に出てくる三越百貨店が時間的に虚構の設定となっていることなどがつきとめられている。同じ朝鮮ものである『巡査の居る風景』と同様に、この作品の趙も日本統治下で生きることによって被支配の立場にありながら、本来は両班として支配者的な自意識を持ち、それが虎狩の場面に露出してくるが、そうした引き裂かれたアイデンティティの主体としての趙の輪郭が的確に捉えられている。

## 第五章 南洋行に関する一考察—「南の空間」における〈境界性〉を中心に

## 第六章 南洋表象と〈南〉の記憶—『南島譚』と『環礁』を中心に

この2章では中島の南洋経験とそれを素材として生み出された『光と風と夢』『南島譚』のような「南洋もの」とされる作品に焦点が当てられている。南洋庁の職員として赴いたパラオは中島に違和感を与えるが、その異空間性の認識が、同じく南洋サモアに晩年赴いたステューヴンソンに仮託された『光と風と夢』のモチーフとなるとともに、方向を逆にして中国北方を舞台とする『李陵』を生み出す下地となったという考察がされている。南洋を舞台とする作品は他作家によっても書かれているが、文化的貧困を指摘し、日本を優

位に置こうとする言説が少なくないのに対して、中島は日本とは異質な文化、習俗に共感を持とうとする姿勢を示しているところに、異空間への親しさをモチーフとするこの作家の眼差しのあり方がうかがわれるとされる。とくに『マリヤン』において、南洋が実は未開と文明の境界的時空であり、そこに生きる女性にその境界的価値観が託されているという指摘はユニークさをもっている。

#### 第七章 『李陵』に関する一考察—「匈奴」という接点について

『李陵』を論じたこの章では、典拠である『史記』『漢書』との比較が仔細におこなわれ、中島がどのように典拠を踏まえつつ独自の人物像を作り上げたかを中心として考察がおこなわれている。たとえば『李陵』の李陵が匈奴に投降する際に、『漢書』では自覚的に降参するのに対して、『李陵』では後ろから襲撃されて意識を失ってしまい、気がつくと虜囚となっていたという変改が施されている。陸氏によればこの変改には「無理をしながら南洋行を決行し、不本意な異国生活を送らざるをえない」中島の影が落ちているとされるが、総じて古代中国を舞台として展開されるこの作品には、執筆時の著者自身の意識や、戦時下であった同時代の日本の姿が寓意的に映し出されているという。なかでも投降後も漢への忠誠を失わない蘇武の姿には、天皇への忠誠のもとに戦争を遂行していた当時の日本の価値観が投影されており、この人物が作品の中心にはならず、むしろ匈奴という異世界に生活の場を移し、次第にその文化や習俗になじんでいく李陵のあり方に、当時の国家主義を相対化する意味が込められているとされる。

#### 論文の評価及び審査の概要

本論は中国、朝鮮や南洋といった「異空間」を舞台とする作品群を対象として、人間存在の曖昧さを描き出す中島敦の表現者としての個性を浮かび上がらせようとするもので、論の姿勢や方向性が一貫しており、その枠内で捉えられた作家の輪郭が分かりやすく提示されていることは高く評価された。陸氏の叙述は総じて丁寧であり、また同時代の資料への探索が周到におこなわれていることが論の説得力を高めている。とくに戦前の京城を舞台とする『巡査の居る風景』『虎狩』の背景に対する綿密な調査によって、中島の作品に込められた虚構性とそれが伝えようとするメッセージが明確に捉えられていることは、従来の研究ではなされなかったもので、本論の成果といえるものである。

また中国人留学生としての利点を生かし、中国の歴史・古典に対する学殖の豊かさを盛り込む形で『李陵』を論じる部分は読み応えがあり、また古典の引用も本文に加えて自身による日本語訳を示すなど、意欲的な姿勢がうかがわれた。『李陵』が古代中国を舞台としながら、執筆時である戦時下の日本の状況を寓意的に描き出しているという指摘自体は決して陸氏が初発ではないものの、先行研究を相対化しつつ、匈奴という異空間に対しての認識の問題を、李陵、蘇武、司馬遷の対比のなかで描き、古代中国と近代日本という二つの世界を折り重ねていく中島の技法と時代意識が丹念に辿られており、本論のハイライトをなしている。

反面、論述の細部においては不十分な点が散見されることも否定しえない。最終試験においては主人公と作者を同一視して扱う叙述がしばしば見られ、作者の分身性とそこに込められた問題意識との境界が曖昧になっている面があることや、資料が博搜されていることは評価される一方で、その扱いにやや偏りが見られることが委員から指摘された。また論の二つの柱である「異空間」と「アイデンティティー」という問題についても、両者の論理的な整合性がもっと図られるべきであつたらうという意見も出された。こうした審査委員からの指摘に対して陸氏は誠実な応答を示し、口頭での説明によって論を補うとともに、それらの指摘を今後の課題として、さらに研究を進めていく所存であることが表明された。

上記の論文の内容と最終試験での応答を踏まえた上で、審査委員会は全会一致で、陸氏の提出論文を博士の学位にふさわしいものとして判断した。